

絵本づくりの
チャリティイベント



市民活動の財源のなかでも、「寄付」は自由度の高い民間財源として魅力的だ。市民団体の独立性確保や自主事業活性化に生かして、支援者にとっては身近で手軽な参加の機会になる。

しかし、NPO法人の実態調査では、総収入のうち寄付はわずか6.9%。55.6%の団体は、寄付金収入が0円という(注)。

本特集では、市民参加や協働を意識し工夫された寄付活動例を取り上げた。寄付という参加を広げて、活動の支えを得るヒントにしてほしい。

(注) 内閣府『令和2年度 特定非営利活動法人に関する実態調査 報告書』2021年8月

フードバンク
設立に
寄付で参加



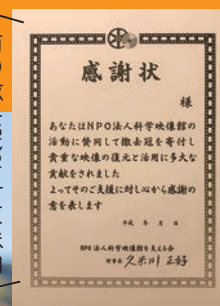
(5ページ)

ステイ生活に参加



(8ページ)

歯の
撤去冠
寄付に
参加



(9ページ)

チャリティ
ウォークに参加

(2~3ページ)

特集

「寄付で参加」 を広げよう



写真は参照ページの各事例団体より提供

みんなが集めてみんなで使う とちぎコミュニティ基金の合同ファンドレイジング

とちぎボランティアネットワーク（以下、Vネット）が運営する「とちぎコミュニティ基金」は、2008年に栃木県内の中間支援組織や企業関係者で立ち上げた地域公益ファンドだ。

当初は、企業系財源の助成事業の運営と、寄付を求める団体の情報公開促進からスタート。翌年から、団体や市民の参加を前提としたファンドレイジングを実施。「NPO合同ファンドレイジング」と呼ぶこの方式で、20年度は1318万451円を集めた。

寄付集めがイベント参加の条件

最初の取り組みは「寄付ハイク」。寄付先団体を選んでハイキングの参加費を寄付する、シンプルなプログラムだ。3回目までは「寄付登山」と言われるハードな行程だったが、歩きやすい遊歩道や街なかなどのコースに見直し参加者を増やし、90万円以上集めたこともある。

しかし、Vネット理事長の矢野正広さんは「自分が出した参加費を寄付す

るだけでは、これ以上広がらない」と感じていた。そこで13年から、参加費とは別に寄付を集めることを参加条件にした「チャリティーウォーク56・7」を開始。目的はVネットのフードバンク事業に特化した。参考にしたのは、国際NGOオックスファムの「トレイルウォーカー」（左ページ囲み参照）だ。参加者は原則3〜5人のチームで、宇都宮市内から日光いろは坂を含む56・7キロを2日かけて歩く。「フードバンクを支援する」を前面に出し、1チーム3万円の参加費に加えて3万円以上の寄付を集めてエントリーしてもらった。走破と寄付集めにチャレンジする参加者を「チャレンジャー」として公開し、チャレンジャーを選んで応援する寄付も募集。小学生から参加できる、参加費1000円の「5キロコース」も設けた。

第1回は、合計210万7287円が集まった。その後も参加動向や意見を受けて調整を繰り返しながら、年1回の開催を続けている。

2020年4月

がんばろう栃木！ コロナ支え合い基金開始
(13団体の合同ファンドレイジング)

自主開催の事前チャリティーイベント



チャリティーネット
(2014年10月)



チャリティーダンスパーティー
(2015年10月)



チャリティーサンタ街頭募金
(2020年11月)

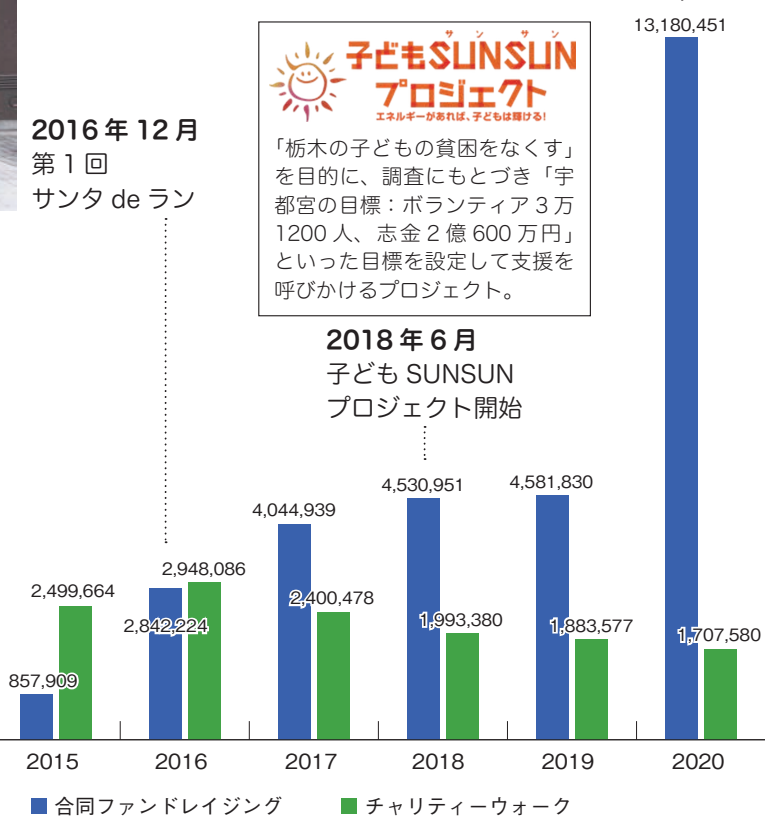
写真提供(全て)＝特定非営利活動法人とちぎボランティアネットワーク

特定非営利活動法人とちぎボランティアネットワーク(認定NPO法人)
栃木県宇都宮市埴田2-5-1 共生ビル3階
電話 028(622)0021



「栃木の子どもたちの貧困をなくす」を目的に、調査にもとづき「宇都宮の目標：ボランティア3万1200人、志金2億600万円」といった目標を設定して支援を呼びかけるプロジェクト。

2018年6月 子どもSUNSUN プロジェクト開始



16年から始めた「サンタdeラン」は、「子どもの貧困をなくす」をテーマに12月の宇都宮市内をサンタクローパスに扮して走るイベントで、こちらも参加費の半分以上を「なるべく寄付で集める」などが条件。寄付を受ける団体は事前に募り、各団体でもサンタ参加者と寄付を集めるのが特徴だ。第1回の寄付総額は234万7501円。20年の年末はコロナ禍のさなかだったが、553万6410円となった。

みんながファンドレイザー

とはいえ、イベント参加者が「他人から寄付を集める」ということが簡単にはできないのか。

子どもや若者は、「これにチャレンジするから」と親や先生にまず言うようだ。2年前、大学生の時にサンタdeランに参加した宮坂真耶さんは、事務所で借りた募金箱を持って大学の研究室を回り、先生にチラシを渡して「子どものために走るのよ」と寄付を集めたという。最初は少し抵抗があったが、やってみると「協力してもらえんだ」とうれしくなったそうだ。

チーム参加のグループや、寄付を受ける側として参加した団体、参加はしないが応援したい人たちによる「事前

チャリティーイベント」も多い。1品と500円を持ち寄る「みんなでごはん」や、70〜80代に人気の社交ダンスパーティー。昨年は、高校生の居場所発の自主プログラム「サンタ・ら・ラン」も日光で行われた。宇都宮にある日々輝学園高校パソコン部がオンラインゲームを作り企業協賛を得たこともあった。

「参加者・参加団体の総力ファンドレイジング」というべき様相だが、その原動力は何だろうか。矢野さんは「社会課題への共感で動いてくれると美しいけど、全体としてはイベントを作っていく楽しさのほうが力になるかな。そういうプラットフォームを作ったうえで、寄付先となる参加団体の事前イベントに関しては、それぞれのNPOが取り組む社会課題を前面に出している」と言う。

多彩な人たちが楽しそうに動き、多くの団体が参加することで「全体で〇百万円が集まる」といったインパクトが生まれると、「なんかすごいことやってるな」と注目される。限られた同士の支援を超えるヒントが、ここにありそうだ。

編集委員 百瀬真友美

寄付ハイク (2012年5月)



サンタ de ラン (2019年12月)



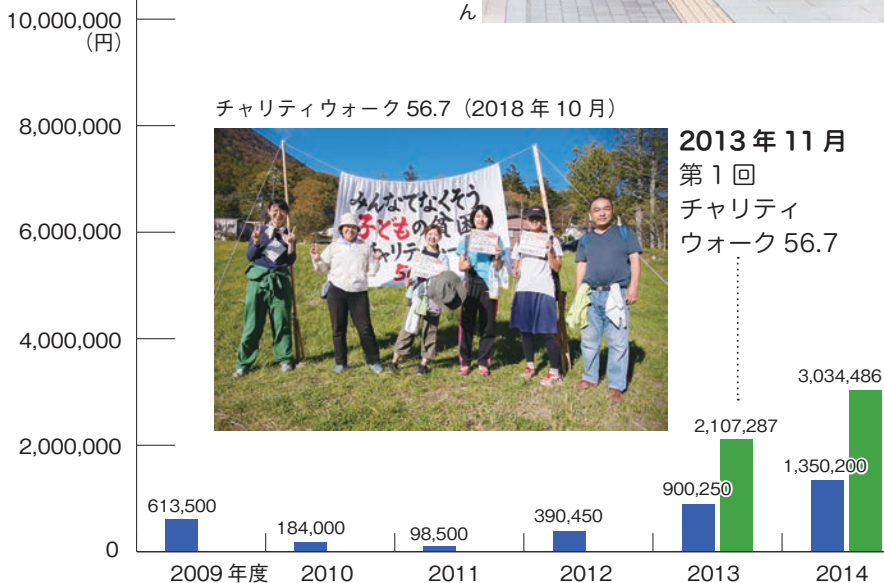
左から2人目が宮坂真耶さん

オックスファム・トレイルウォーカー

オックスファム (Oxfam) は貧困と不正を根絶するため世界各地で活動する国際NGO。「オックスファム・トレイルウォーカー」は、長距離の道程を4人1組のチームで走破するウォーキングイベントで、参加者はチームの参加費とは別に寄付金を集めることが条件になっている。

オックスファム・ジャパン (2018年10月解散) が開催した例では、神奈川県小田原市から山中湖までの100kmを2泊3日でゴール。1チーム (4人) は参加費6万円と寄付金12万円以上を集めて参加することとなっていた。

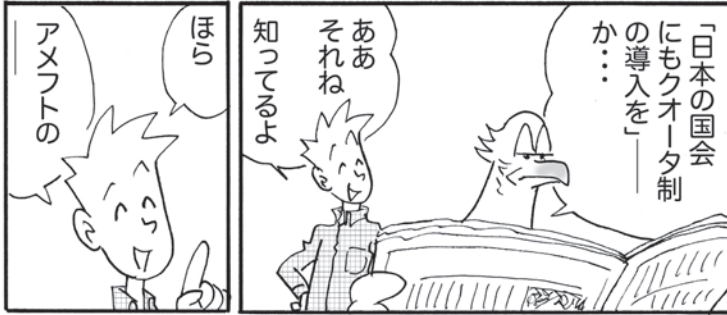
14年5月に行われた「オックスファム・トレイルウォーカー・ジャパン2014」では、100kmコースに143チーム570人、43kmコースに31チーム124人が参加し、3514万9931円の寄付金が集まったという。2015年からは、東日本大震災被災地の福島で開催していた。



うお3君の 気にな〜る セミナー

Vol. 120

「クオータ制」って？



まんが ■ ラッキー植松



Quater
(4分の1)

Quota
(割り当て)

クオータ制とは、あるグループの中である属性の者の割合を決めておくことで、クオータ (quota) とは「割り当て」の意味。これはポジティブ・アクション (以下PA) を実行するための手法の一つで、PAとは社会的・構造的な差別によって不利益を被っている属性 (人種、民族、性別等) の人達に対して、差別が解消されるまでの一定の期間、一定の範囲で特別の機会を与えること等により、実質的な機会均等を実現すること。

今、日本では圧倒的に女性の政治家が少ない。2021年3月に公表されたグローバル・ジェンダー・ギャップ指数の政治分野ランキングでは日本は155カ国中147位。世界的に見ても日本の女性政治参画が遅れているのがわかる。なぜ国民の代表である国会議員に女性が少ないのだろう。日本の女性は能力が劣っている、政治家に向いていない等の理由であるならば皆が知っている。だとするならばそこにこそ社会的・構造的差別が潜んでいることになる。

ノルウェーでは02年に6%ほどしかいなかった上場企業の女性役員を08年に40%にすると決めた。誰もが絶対に実現できないと言ったが、結果は達成。残念ながら今のままでは日本の女性政治家が増えない。日本でもクオータ制を導入する時ではないだろうか。

琉球大学法科大学院教授 矢野 恵美

ヴォロ・バインダー、いかがでしょうか？

ヴォロ2年分(12冊)を挟み込めるバインダー (1冊500円+送料350円) です。お問い合わせはヴォロ編集部/office@osakavol.orgまで



U35

第28回

いま若手起業家が熱い！これからの社会を担う35歳以下の社会起業家、その若さあふれる「実像」に迫ります。思いを行動に移した若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

株式会社RE-SOCIAL リ ソ ー シ ャ ル **笠井 大輝**さん か さ い だ い き

株式会社RE-SOCIAL 京都府相楽郡笠置町有市東畷 23番地
やまとある工房 京都府相楽郡笠置町有市西狭間 24番地
電話 080-6101-6617 Eメール resocial.kyoto@gmail.com

「生態系サービスに最大限の価値創造を追求する」をコンセプトに鹿を対象としたジビエ肉流通事業を展開。山積みで捨てられている鹿やイノシシの死体に課題意識を持った3人が19年に設立。駆除対象とされている野生動物を恵みと捉え、捕獲・解体・加工・販売までを一貫して自社で担っている。創業日は11月29日(良い肉の日)。

害獣として、ただ捨てられている命がある “ほっとけない” 元悪ガキのがむしゃらな挑戦

悪ガキの進路選択

害獣に悩む京都府笠置町^{かさぎ}で鹿のジビエ肉を販売するRE-SOCIALは、鹿の捕獲・解体・加工を一貫して自分たちの手で行っている。肉好きな人でも、動物が食肉になるまでの過程を想像するのはつらいことだろう。笠井大輝さんも、事業を始めるにあたって最もつらかった部分という。山間部出身でもない彼が、本気になって命と向き合う仕事を行うまでには、どんな背景があったのか。

高校時代は何度も先生や警察に呼び出される「悪ガキ」だった。「お前みたいなやつが社会をダメにするんや」とよく言われた。反抗期ということもあり、野球をすることしか考えておらず、自分本位だったと振り返る。家族はそんな彼にそろって「勉強や野球の出来よりも、人としてどうあるかが一番大事」と諭したそうだ。次第にその言葉を意識するようになった彼は、悪さばかりしてきたから、大人になつたら人のためになる仕事がしたいと考えるようになった。

高校3年の秋、野球部を引退して進路選択が迫ってきたが、人のためになる仕事のイメージがわかない。警察か

消防士だろうか……と思った時、たま龍谷大学政策学部のパンフレットが目に入った。説明文には「社会課題解決」の文字。「ここなら人のためになることが学べそうだ！」と卒業間際に大学受験を決意。人生で初めて意思を持って勉強し、その年に合格点ギリギリで入学することができた。

単身フィリピンへ、そして挫折

受験は高い志を持って臨んだものの、入学後は解放感から遊ぶ毎日。しかし、本来大学に進学する予定のなかった自分にとって、貴重な4年間であることはわかってきた。自分を変えたい……。1回生のおわりに、社会課題のひとつとして知っていたフィリピンのスラム街に単身1カ月滞在することを決心。なんと宿も決めず、そこに住んでいる知らない人の家を毎日転々としたそうだ。

この滞を通してスラム街の現状を知り、どうにかできないのか考えるようになる。現地のNGOの人に話を聞いて回ったが、ボランティア活動未経験の自分ができることは見いだせなかった。挫折感をバネに「目の前の社会課題にアクションを起こせる人にな

りたい」との思いを固めて、社会起業の分野で著名な深尾昌峰^{まさたか}ゼミに入ることにした。

獣害と死体の山

ゼミではさまざまなボランティア活動に参加したり、地元の企業と一緒に起業するプロジェクトを動かしたりなど、充実した学びを得る。3回生の就職活動期間に差し掛かり、内定も決まった。獣害について知ったのは、そんな時期だった。

複数の地域へ課題をヒアリングして回る授業が実施され、何度も「獣害」のキーワードに触れていた時、ある地域の人に案内された25メートルプールのような堀に、山積みされた鹿やイノシシの死体があった。惨状に衝撃を受けうろたえる。「かわいそう」「どうして」……。漂う異臭の中、さまざまな気持ちが入り乱れた。獣害が多く行政も処理が追いつかないため、黙認されている場所だった。「ただ捨てられている命。せめて食べるっていう発想にならないのか」。自分とはこれまで縁のない世界だったが、どうしてもほっとけない」と感じた。

最初は起業か就職かを悩むも、フィリピンでの挫折経験が重なり、「また

1997年、大阪府八尾市生まれ。素行不良の過去を改め、社会に貢献できる人になりたいと龍谷大学政策学部へ入学。在学中の2019年に同じゼミに所属する仲間3人で株式会社RE-SOCIALを設立。翌年には精肉加工工場である「やまとある工房」が完成し、事業が本格始動。現在は京都府笠置町を拠点にしている。

逃げるのか？」と自分に問うた。3回生の冬、同じゼミの江口和さんと山本海都さんの3人で、ジビエ肉の流通を事業化することを決めた。

泥臭くても逃げない

経験のない中、狩猟や解体の技術はどう身に付けるか。鹿肉は市場に乗らないため、一般には知られていない。そこでジビエかわいいで有名な徳島県のおじいさんを知り、住み込みで弟子入りをするため門をたたいた。「なんでも手伝うので、僕たちに全てを教えてください」。最初の数週間は草刈りばかりだった。だが次第にジビエのことを教えてもらえるようになり、3カ月の修業で事業化の道筋をイメージできるようになる。

笠置町を拠点に選んだのは、自家消費が主となる農耕の被害は、国の示す害獣被害額に算定されないことを、住



笠井 大輝さん
株式会社RE-SOCIAL代表

民の話から気づかされたからだだった。数値化されない地域の問題は誰も助けられない。ここなら自分たちが役に立てることがあると意気込んだ。

ところが、地域にゆかりのない3人。最初は感謝されるどころか不信任を抱かれたそう。地域の手伝いを申し入れ、半年以上、毎日いろいろな場所を回った。けれども、なんとか建築場所を用意した工場は、住民の反対が大きく断念を余儀なくされた。諦めず過ぎていたある時、そんな姿を見て手を差し伸べてくれる住民が現れ、工場を建てる土地を譲ってくれることとなった。だが、ようやくほっとしたものもつかの間、遭遇したのが新型コロナウイルス。物流がストップし、結局工場が完成したのは半年遅れの20年10月だった。

着工できない期間は焦燥感にかられ

人と自然の共生を目指して

本格始動して1年、ジビエ肉は飲食店向け販売の他、オンラインでの個人販売も好評だ。鹿の廃棄部位の割合をさらに減らすため、革製品やペットフードの開発にも力を入れている。

「家畜が増えると環境汚染や穀物危機が進みます。一方で、人の生活や社会の影響で、山で生きられない野生生物があふれて、獣害が起きている。生態系の中で人が捕食者の役割を果たし、食べたあとの資源を自然に還元するところまで担う会社になりたいです」。数々の困難の中でも決して諦めなかつた笠井さんの言葉は力強い。

編集委員 稲田千紘

「TIFAカフェ・サパナ」

阪 急豊中駅から徒歩5分ほどの場所に、黄色いのぼりとガラス張りの明るい店内が特徴の「TIFAカフェ・サパナ (Cafe SAPANA)」がある。2012年にオープンしたこの場所は、NPO法人国際交流の会とよなか (TIFA) が運営を支援。1階のカフェ、2階のイベントスペース (TIFAサロン) からなる「世界と出会う空間 (ところ)」として、「地域に住む外国人の活躍の場」「食文化を通じて交流する場」「外国の言葉や文化を体験したり学んだりする場」の三つの機能を提供している。

ネパールの言葉で「夢」を意味する店内には、木目調のテーブルが並び、壁面には大きなキルトが飾られている。キッチンでは地域に暮らす多様な外国人が「シェフ」として腕をふるい、各国の家庭料理を日替わりのランチとして楽しむことができる。座席とキッチンとの距離が近く、スタッフとお客さんが、まるで家族のように会話している様子がほほえましい。

料理教室から広がったこの取り組みは今年で9年目を迎え、活動の中から、ベテランの店長や、自分の店をオープンするメンバーも生まれてきた。今では十数人の外国人が、日々のさまざまな暮らし・職業と並行して毎月のメニューを一緒に考え運営している。包丁やまな板の使い方など、スタッフどうしが互いの文化の違いに驚くこともあり、外国人が日本に暮らす中で多文化を理解する場となっているとのこと。

第1日曜日は、海外からの留学生や家族を対象に、ランチをともにしながら生活や学校で困っていることなどを聞く「HAND IN HAND」を開催。他にも手づくりの手芸品や料理が並び「サパナマーケット」や、世界の人々から話を聞くTIFAサロンもある。多様な文化背景を持つ人どうしが食を通じて互いを知る「小さな地球」を感じることができる。

編集委員 山本佳史

TIFAカフェ・サパナ (Cafe SAPANA)

大阪府豊中市本町3丁目3-2-101 電話 06-6840-1014
営業時間 11:30~14:30 (L.O.14:00) ※売り切れ次第終了
土日・祝日休み

取材日はメキシコ料理。シェフはカルロスさん



提供= TIFA カフェ・サパナ



ひらけ!モトム

大学生のぼくが世田谷の一角で介助をしながらきた、団塊世代の重度身体障害者・上田さんの人生

岩下紘己 著
出版舎ジグ、2020年9月
1540円 (税込)

「ひらけ!モトム」。このちょっと不思議なタイトルの「モトム」は、脳性麻痺で24時間介助を受けながら、世田谷のマンションで自立生活を行う上田さんの名前である。他に比べて時給がよいからと上田さんの介助のアルバイトをしていた大学生が、介助の際にかわす会話から上田さんの人生エピソードに強くひかれ、卒論のテーマにしたいと聞き取りまとめた。障害者を「隔離」し「管理」するものとしていた時代から現在までの70年余り、ひとりの全身性重度障害者が何を感ずるのよう生きてきたのかが書かれている。

上田さんの人生は多彩だ。電動車椅子で八百屋の配達をしたり、演劇ワークショップに参加したり、ステップバスに視察に北欧まで行ったり、多くの人と出会い共に活動し、課題があれば粘り強く交渉し、自分をさらけ出して地域に根付いていこうとする。

20代の上田さんが考える「自立」は、電動車椅子に乗って一人で自由に外出することであり、親元を離れて施設で暮らすことだった。それが次第に「地域の中で当たり前」に暮らすこと」に変わっていく。上田さんは言う。「障害者が一人の人間として生きていくためには、行政の協力はもち

ろん住民の理解が不可欠。理解とは、お互いがお互いを知り合い、分かり合い、認め合うこと。その上でお互いが迷惑をかけあう。それが、みんなが住みやすい社会の形」と。

上田さんは今、自分の住みたい場所で朝を迎え、食べたいご飯を食べ、会いたい人に会い、活動に取り組み、眠りにつく。体を張って、みんなに自分の存在を知ってもらおうという過程を通じて、この日常を当たり前にしていった。

本書は、「みんなと、ひとりで生きていく」ことをめざし自分をひらいていった上田さんの歴史である。

編集委員 中川 智子

～市民視点のドキュメンタリー映画を紹介する

私 たちにとって馴染み深い横浜中華街。しかし、その街の背景を知る人がどれだけいるだろうか？ ドキュメンタリー映画『華のスマカ』は、監督の林隆太自身の出自を見つめることで華僑の歴史を紐解く、とても真摯でひたむきな作品である。

日本人として育った林は、15歳の時に自身が華人と日本人のハイフ、いわゆる華僑4世であることを母から告げられた。中国人である意識はなく、むしろ中国にあまり良いイメージを抱いていなかった彼は、ある日1枚の写真に出会う。それは「台湾解放」というスローガンを掲げ、横浜中華街を練り歩く父の姿だった。父が毛沢東を支持する教育を受けていた、その生い立ちを知り、愕然とした林はさまざまな人への取材を進めていく。

これをきっかけとして、映画は1952年に横浜中華学校で起こった「学校事件」に行き当たった。そこには当時の横浜中華街で起こっていた中華人民共和国（大陸系）と中華民国（台湾系）の対立、そして日本・中国・台湾の政治に翻弄されてきた華僑の苦難と葛藤の歴史があった。横浜中華街の観光地ではない知られざる一面。戦後の中国と台湾の歴史を鑑みれば、海を隔てた日本の地で同じような状況があったとしても何ら不思議ではない。しかしそのことにあまりにも無自覚であった私は、映画を観ながら内心忸怩たる思いを抱き、登場人物たちの人生に思いを馳せた。こんなに身近な街で、中国の歴史と時代に翻弄された人々がいたのだ。そしてそれを自身の家族という身近なテーマから時代を映し出そうと映画を

撮った林監督には感服する。私たちは社会の中で生きている。だからこそ、その社会に生きる個人を深く見つめていけば、その人の生きた時代状況や社会の在り様が見えてくる。林監督は自身の家族にカメラを向けることで、日本と中国、そしてその歴史の片鱗をのぞかせてくれる。これだけのテーマを扱いながら、本作がある種の軽やかさを保ちたのはカメラを向けた父や母のキャラクターゆえだろう。映画のラスト、監督の不安や戸惑いをよそに、父がさりげなく打ち明ける言葉に、観客である私も戸惑いながら、それでもどこか心おぼやかな感覚を味わってしまう。そんな不思議な魅力を感じつつ、改めて国とは何か、国籍とは何かと考えずにはいられない。



監督・企画 林隆太
プロデューサー・撮影・編集 直井佑樹
配給 記録映画「華僑」製作委員会
2020年 | 日本 | 98分 | DCP | ドキュメンタリー
上映情報は <https://www.hananosumika.com/>

今月の作品 「華のスマカ」

●今月の館主

しまだ りゅういち
島田 隆一

2012年、監督作『ドコニモイケナイ』で日本映画監督協会新人賞受賞。監督最新作は『春を告げる町』（20年公開）。プロデュース作品『帆花』が22年1月、ポレポレ東中野他にて公開予定。現在、日本映画大学専任講師。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」いつも思います。



イラスト：杉浦 健



14歳で“おっちゃん”と出会ってから、15年考えつづけてやっと見つけた「働く意味」

川口加奈 著
ダイヤモンド社、2020年9月
1760円（税込）

14歳でホームレス問題に出合った著者が19歳で後に認定NPO法人となるHomedoorを立ち上げ、問題解決のために奔走したこれまでの15年間とこれからの展望を語った自叙伝的な一冊。

著者は中学校からの帰り道、偶然目にした「炊き出し」の行列に心を奪われる。そのことがきっかけとなって「炊き出し」のボランティアに参加、以後、ホームレス支援にのめりこんでいく。

路上生活から抜け出せない要因として「仕事」「貯金」「住まい」があると考えた著者がまず着手したのが「就労

支援」。ホームレスとなった中高年男性の技能を生かした仕事が提供できないか模索した結果、シェアサイクル事業をスタートさせることになり、自転車の貸し出しやメンテナンスなどの業務を担ってもらった。放置自転車とホームレス問題という二つの社会課題を同時に解決するビジネスモデルを生み出したと、後に評価されることになる。

次に手掛けたのが「住まい」の提供。路上生活を脱して家を借り、定住生活が送れるようになるまでの「つなぎの住まい」としての機能も兼ね備えた通称「アンドハウス」（現「アンドセンター」）を設立、

発展させながら運営を続けている。

近年、ホームレス問題に変化の兆しが見られ、「居場所」を失った10代、女性、外国人などが「アンドセンター」を訪れるなど相談者の属性が多様化しているという。

すべての人に「居場所」と「選択肢」を提供して「誰もが何度でもやり直せる社会」をつくっていく。これが15年間かけて見出した著者の「働く意味」であり、10代のころから思い描いた「夢」でもある。

編集委員 阿部 太極